

サンディエゴより

—中嶋 嶺雄—

リレーコラム

ガイドブックにも出ていない町

サンディエゴというと、世界的に有名なシー・ワールドや動物園を思い浮かべる読者が多いと思うが、私はまだ訪れたことがない。そのかわり、一般の観光ガイドブックには出ていない人口僅か千人ほどの町・ジュリアンへは、来客を案内してもう六回も行った。

パリでの現代中国に関する日仏共同研究セミナーやブダペストでの国際宗教学会などにおける報告などのため、三週間ほどサンディエゴを留守にして戻ってきてみると、雲一つない南カリフォルニアの真夏の青空がことさら目にしみる。それなのに空気は清涼で、夜などは信州の夏よりもしのぎやすいくらいだ。私が住むラ・ホーヤや近くのデル・マーのビーチは観光客で賑わっており、私自身もこちらに戻った翌日から、夏休みで来訪する日本からの友人・知人の応接に明け暮れた。

掃路は大自然のなかの荒涼としたヘンシヨウ湖のほとりをドライブできるというこのコースの魅惑もさることながら、ジュリアンには私を誘う二つの大きなポイントがある。

ゴールドラッシュの面影残る

その一つは、ジュリアンが一八七〇年代に隆盛をきわめた金鉱の町であり、カリフォルニアのゴールド・ラッシュ時代を偲ぼせるたずまいが数多く残っていることである。もう一つの、そして私にとっての最大の魅力は、ジュリアンが信州と同じくリンゴの名産地であるばかりか、そのアップル・パイが頬が落ちるほどに美味



しいことである。南北戦争に従軍したジョージア州の青年ベイリー兄弟とジュリアン兄弟が戦い敗れて遠くこの地に辿り着き、最初の金鉱を発見したのは、一八七〇年二月二十日(他の説ではワシントン誕生日の二月二十二日)だという。ジュリアンはまたたくまに一獲千金を夢

見て集まる者たちの町となり、一八七三年には当時人口約五〇〇〇のサンディエゴと郡(COUNTY)庁の所在地を競い合うほどになった。しかし、ジュリアンの金ブームは一八八〇年代には早くも衰退し、最後の金山も一九四二年には閉鎖された。現在は観光客目当ての金鉱跡が残ってい

ただだが、往時を偲ばせる食堂ジュリアン・カフェや由緒ある旅館ジュリアン・ホテルなどはそのままの形で残っていて現在も営業を続けており、そこに身を置くと、一瞬、白黒映画の主人公になったような気分にはひたることができる。

ジュリアンのアップル・パイは、現在のジュリアン・ホテルの前身であるホテル・ロビンソンを二八九七年に開業したアルバート・ロビンソンの愛妻、マーガレットの手によるものが高評だったのがはしりだという。アルバート夫妻は黒人奴隷から身を起し、ジュリアンの発展にも貢献した。

リンゴを使ったさまざまな食品もジュリアンには現在、アップル・パイの店が何軒もあるけれど、いつも行列ができるほど評判なのは、店先で作る工程が見えるフレッシュリンゴにレモン・シュース、バター、砂糖とスパイスだけを用い、パイ皮(クラスト)は野菜でできたシヨートニング、メリケン粉に水と食塩で作っている。アップル・パイには、甘くてパン粉状のヘクラム・トッピングと滑らかな薄片状の「フレイキイ」の二種類があるが、これらの表面にはソフト・マーガリンを使っている。こうしてできたアップル・パイの何と美味なることが。私はこれがアップル・パイというもののなかと再確認せざるを得なかったが、それは私が案内したすべての客人の感想でもあったと思う。

ジュリアンにはアップル・パイ以外にもアップル・バター、アップル・サイダーなどいずれも美味なるリンゴ製の自然食品やリンゴにちなんだ気の利いた土産物が多い。リンゴそのものも、もうすっかり忘れられた味になってきている赤リンゴ(紅玉)や青リンゴ(祝)を想わせる旨さだ。

翻って、リンゴの信州はどうだろうか。リンゴの本当の味を忘れて、品種改良で味も形も良くなり過ぎたリンゴをいささかもあましているのではなからうか。さしあたり、松本周辺の波田町か三郷町あたりがジュリアンと姉妹町村関係を感じ、ジュリアンに大いに学ぶことを提案したい。(カリフォルニア大学サンディエゴ校大学院客員教授 松本市出身)